



地域で困っている当事者や家族に 寄り添う地域づくり

洲本市社協では、「誰もが安心・安全に暮らせるまちづくり」を目指し、子どもから高齢者、障害のある方が自分らしく暮らし続けられるまちづくりに向け、地域住民や関係機関と協働した地域福祉活動が展開されている。高齢化が進む中、認知症の方も地域で安心して暮らしていくため、さまざまな当事者・家族会の方々の声からの学び・気付きを出発点とし、地域の担い手育成や地域住民の交流の場づくりに取り組んでいる。

継続的な支援による家族会の組織化

市社協で、認知症の当事者に対する支援が始まったのは、昭和63年に開催した介護者向けの教室にさかのぼる。その後、教室の参加者による話し合いの中から「介護者同士の交流・集いの場が必要」との声が上がり、社協が後押しをする形で、平成12年に「にじの会」(旧市域)、平成19年から「ごしきの会」(旧五色町域)として認知症の家族会がそれぞれ結成され、現在まで活動を継続している。

社協職員は、毎月の定例会に参加し、介護に必要な情報提供を行うとともに、家族会で出された意見を地域包括支援センター等の関係機関も交えて一緒に実現できるよう、継続的な支援を行っている。

定例会では、近況報告だけでなく介護の勉強もしています



悩みの共有から、支え合いの輪の拡大へ

家族会の立ち上げ当初は、介護者同士での悩みの共有や認知症に関する学習会が中心だったが、次第に介護者の関心や想いをベースに、介護施設の見学や他市町の家族会との交流などへと活動が発展してきた。社協職員は、きめ細かな情報提供や関係機関との調整など側面的支援を行っている。

最近では、家族会が中心となって介護施設を交えたクリスマス会なども開催してきたが、平成23年11月には県内の家族会が一堂に会する「介護者のつどい IN 淡路島」を洲本市で開催した。

社協が関わることにより、家族会だけで完結するのではなく、介護者・関係機関・他市町の家族会などさまざまな人や団体とのつながりを大切にした支え合いの輪が広がっている。

洲本発で県内の家族会の交流ができました!



取材を終えて

在宅で24時間寄り添いながら介護することは、介護者にとって苦勞の連続だと思います。家族会という場で介護の苦悩を分かち合うことで、学びやりフレッシュができます。当事者が本来持っている力を十分に発揮できるよう、寄り添いながらサポートしている社協の取り組みは、地域福祉の原点だと思いました。

会長から 洲本市社会福祉協議会 会長 伏見 正夫

洲本市社協では、「誰もが安心・安全に暮らせるまちづくり」を目指し、子どもから高齢者、障害のある方が自分らしく暮らし続けられるまちづくりに向けて、地域住民の方々や関係機関と共に活動を展開しております。

今後ますます高齢化が進む中、認知症の方も安心して暮らしていくために、家族会の皆さんと連携を深めながら、これからもさまざまな事業に取り組んでいきたいと考えています。

また、今後さまざまな当事者の方々の声からの学び・気付きを出発点とし、当事者へ寄り添いながらサポートを行っていききたいと思います。

